

# I 学部研究の概要

# 目 次

1. はじめに .....	1
2. 生ゆ生きと動く子どもをめざして .....	1
3. 学部研究を通して .....	2

# 生き生きと動く子どもを育てる教育課程の編成

## —— 学 部 研 究 編 ——

### 1. はじめに

本校は、昭和55年4月、附属小・中学校の特殊学級を統合して開校した経緯から、初年度より教育課程編成の研究に取り組まなければならなかった。その際、わたしたちは、「動き（本校紀要第5集指導計画編を参照）」を教育課程編成の柱としてとらえ、56・57年度には生活単元学習、58年度には日常生活の指導、作業学習、音楽、図画工作・美術、体育・保健体育、59・60年度には感覚運動の指導、国語、算数・数学、特別活動、養護・訓練の指導計画を作成してきた。58年度からはこれと並行して、各学部が当面している課題を取り上げ年次計画で実践研究を行ってきた。

各学部の研究テーマは、次に示すとおりである。

○小学部研究テーマ：「感覚運動に視点をあてた日常生活の指導」

（感覚運動の内容は、全教科・領域の基盤をなすものである）  
（という考えにより59年度から次のようにテーマを変更した。）

「生き生きと動く子どもを育てる感覚運動の指導」

○中学部研究テーマ：「生き生きと動く子どもを育てる体育指導」

○高等部研究テーマ：「一人ひとりの意欲を高める作業学習の計画と実践」

### 2. 生き生きと動く子どもをめざして

わたしたちは、学校全体として「生き生きと動く子ども」を「生活体（子ども）と外界（環境）とのかかわりを向上していく子ども」ととらえた。これに基づいて、各学部では「生き生きと動く子ども」をさらに具体的にとらえて研究をすすめてきた。

#### 小学部の研究

人は、常に周囲の環境との相互作用の中において、環境からの情報を受け入れ、環境に働きかけて生活している。この過程は人の内部においては、情報→受容器→中枢神経系→効果器→行動という一連の働きにより行われている。中枢神経系に器質的、機能的障害をもつといわれている精神発達遅滞児に対して、中枢神経系が環境からの情報を適切に処理できるようにしていくことは、彼らの発達の可能性をさらに伸ばしていくものであると考える。そこで小学部では、「生き生きと動く子ども」を「環境からの情報を適切に受けとり、処理し、行動していく子ども」ととらえた。そして、一人ひとりの子どもの発達に応じて「感覚入力段階」、「粗大運動段階」、「知覚・運動都階」の3段階を設け、それぞれの発達に即した内容を準備していくことに

より、「生き生きと動く子ども」に迫っていくことができると考えて研究をすすめてきた。

### 中学部の研究

人間の発達の過程において、中学生という時期は児童期から青年期への移行の時期であり、精神・身体両面の発達は他の時期に比べて大きい。このような時期に身体を鍛えることは、運動機能の発達はもちろんのこと、社会性の高まりや情緒の安定をも図ることができると思う。そこで中学部では、「生き生きと動く」状態を「心が揺り動かされることにより、五感や筋肉を働かせ意欲的に活動する」状態ととらえた。そして、「素材を生かした教具」、「集団」、「方法」の3つの構成要素を一人ひとりの子どもの発達の最近接領域内に設定することにより、「生き生きと動く子ども」に迫っていくことができると考えて研究をすすめてきた。

### 高等部の研究

高等部の教育は、後期中等教育の場として、また社会への接点の場として重要な位置を占める。中でも作業学習は、「物づくり」を通した「人づくり」と言われる通り、総合的、実際的な体験を通して社会生活への適応力や職業生活に必要な基本的な態度を身につけさせる場としてその意義は大きい。特に本校高等部の生徒たちにとっては、仲間との調和的な人間関係を保ち、自分の役割を根気強くやり遂げる場として重要であると思う。そこで高等部では、「生き生きと動く」状態を「意欲的な姿」として「積極性を身につけた生徒、協調的な態度を身につけた生徒、根気強い生徒、責任感の強い生徒」ととらえた。そして、一人ひとりの興味・関心や仲間意識、自己信頼などの環境刺激に加えて、適時性に応じた課題を探り、一人ひとりに即した作業内容を準備するとさらに「意欲的に活動する生徒」に迫っていくことができると考え、生徒の実態を十分にとらえるとともに「作業要素・五段階表」を作成することにより研究をすすめてきた。

## 3. 学部研究を通して

前述のように、この2カ年間、小学部、中学部、高等部においてそれぞれの研究テーマを掲げて「生き生きと動く子ども」を追求してきた。テーマの掲げ方やテーマへのせまり方には各学部それぞれ違いがあったが、わたしたちが共通してとらえることができたことは、「生き生きと動く子ども」に迫るためには「一人ひとりの子どもの発達に即応した内容」を準備しなければならないということであった。このことは、小学部においては「個人プログラム」、中学部においては「評価」、高等部においては「作業要素・五段階表」等によって一応の具現化をみ、「生き生きと動く子ども」に迫ることができたと思う。しかし、これらのものは、内容的にも方法的にもまだ多くの問題を含んでおり、今後、実践を積み重ねる中でさらに充実したものへと改善していかなければならないと思う。

なお、詳細については、この後のそれぞれの学部研究を参照されたい。